ためらい

LA RÉTICENCE
Jean-Philippe Toussaint

ジャン=フィリップ・トゥーサン
野崎歓・訳

集英社

ためらい

マドレーヌに

I

今朝、港で猫の死体を見た。港の水面に黒猫が浮かんでいて、体をぴんと硬直させて、小船のまわりをゆっくりと漂っていた。猫の口からは腐った魚の頭がだらりと垂れ、そこから釣糸の切れ端が三、四センチほどはみ出している。それを眺めながらぼくが考えたのは、魚の頭は釣糸の先についていた餌の残骸で、猫はその魚を取ろうとして水面に身を乗り出し、捕まえたと思った瞬間に、鉤(はり)を口にひっかけ、バランスを失って落ちてしまったのだろうということだけだった。港の水はそのあたりではとても濁っていたが、ときどき、ぼくの目の

下を、ベラやボラなどの魚が、一列になって静かに通りすぎていくのが見えたし、水底の方では、海草や小石のあいだで、腹が裂けて腐りつつあるウツボの死体に、おびただしい数の稚魚が群がっていた。立ち去る前に、もうしばらく突堤にたたずんで死んだ猫を眺めると、それは左に寄ったり右に寄ったり、行きつ戻りつしながら、かすかな潮の流れに従って、港内をゆるゆると漂い続けていた。

ぼくがサスエロの村に着いたのは十月の終わりのことだった。もう秋で、観光シーズンも終わりに近づいていた。ある朝、スーツケースやかばん類と一緒に、タクシーで村の広場に到着した。運転手は、タクシーの屋根のキャリアからぼくの息子の折り畳み式ベビーカーを下ろすのに手を貸してくれた。それは古いディーゼル型のルノー504で、運転手がエンジンを切らずにいるせいで

広場にはゆっくりとした唸りが響き続けた。それから彼は、その辺りに一軒しかないホテルの場所を教えてくれたのだが、ぼくはそこに前にも泊まったことがあって知っていた。ベンチのそばにスーツケースやかばんを残して、息子と一緒にホテル目指して進み始めたのだけれど、ベビーカーにおさまった息子は、何の心配もない様子で、ぬいぐるみのアザラシをじっくりと眺め、両手にはさんでいじりまわし、ためつすがめつ念入りに調べながら、ときどきあっぱれなほど自然に、堂々たるおくびを洩らした。ホテルの入口には、まず花で飾られたステップがあり、その先にガラス張りの二重扉が開くようになっていて、ぼくはベビーカーを腕に抱えて何段かのステップをよじ登った。扉を押すやいなや、ホテルの主人が雑巾を持ってタイルの床に這いつくばっているのに出くわしてしまい、主人は頭を上げて、面前に突き出されたベビーカーをいぶかしげに眺めた。床があまりに清潔で、掃除が行き届いていたので、ベビーカーをど

こに置いたらいいのやら見当もつかず、結局ベビーカーを手に持ったまま、彼に、いく晩か、三日か四日、あるいはもっと長く、週の終わりくらいまでか、自分でもはっきりしないのだけれど、泊めてもらえるだろうかと尋ねた。

サスエロに着いて最初のうちは、ゆっくりと散歩をして、隣の村落へと登っていく狭い小道沿いに歩いたり、村の背後に数キロにわたって広がる荒涼とした浜辺を見に行ったりして一日を過ごした。心の中で波の音と風の音がまじりあうのを感じながら、ぼくは岸辺をゆっくりと進んだ。広大で人気のない、寂れた浜辺に、つむじ風だけが倦むことなく吹きつけている。ときどき歩を止めて、砂の上に腰を下ろし、干からびた海藻が砂丘に向かって飛んでいく中、何気なく小石を一、二個拾っては、ぼんやりと海に投げこんだりした。小さな安全ベルトでベビーカーにしっかりと固定された息子は、ビスケットを手に、ぼ

くが小石を投げるのを眺めていた。ときおり、息子は体を前にかがめて浜辺に落ちている何かを取ろうとし、ぼくはその度に、彼の欲しがるものを手渡してやったのだが、それは潮に運ばれて打ち上げられた、奇妙な魔よけのような形をした枯れ枝や、丸い石や、小枝などだった（プラスチックの古いサンダルというときもあって、彼はほうほうと小さく喜びの叫びを上げながら砂だらけのサンダルの裏側に頬ずりした）。

ホテルの部屋に戻ると、ぼくは部屋のまん中にでんと置かれた格子つきベッドに寝そべって何時間も過ごした。何をするわけでも、特に何かを待っているわけでもなかった。まわりを取り囲む壁は、じめじめとして汚く、ベッドカバーやカーテンのくすんだ花柄模様に合わせた、古いオレンジ色の布地が張られていた。ぼくは息子の旅行用ベッドをそばにしつらえた。このなかなか便利

な折り畳み式小型ベッドは、何色かの金属製チューブがぴたりと嵌まり合って長方形のフレームを形作った、小型版ポンピドー・センターとでもいうような代物で、それが部屋の薄暗がりの中、かばんやスーツケースの隣にそびえ立っている。息子が小さな腕を楯のようにして胸元で曲げ、もはや片時も手放さなくなった古サンダルをベッドの奥深く、自分の横に大切に置いて、静かに眠っているあいだ、ときどきぼくは起き上がって、靴下のまま室内を数歩歩いた。窓際まで行ってカーテンを開け、道を眺めると、人通りのない道の向こうに雑草の繁った空き地があり、遠くでは、枯れ枝の重みにも耐えかねる風情の、痩せたイチジクの木の横で、ロバが一頭、古い板切れや、捨てられたタイヤ、裏返しになってその場で朽ちつつあるボートなど、いろいろな廃物に囲まれて、ウイキョウの草を食べていた。

サスエロにやって来たのは、ある意味ではビアッジ家の人たちに会うためだったが、これまでのところ、ぼくは何やら謎めいた不安に引き止められて、会いに行くのをずるずると延ばしているし、村を散歩するときには彼らの家の近所を避けさえしている。到着の日からして、ホテルに部屋を取ったらすぐに彼らのところに行くつもりだったのだが、なかなか腰を上げる気にならず、結局は夜までずっと部屋にこもっていたのだ。到着からすでに二日たって、外出する際はビアッジ家と反対の方向にしか行かないようにしているとはいえ、いまだ彼らと出くわさないのにはいささか意外な気持ちになってきている。しかしながら、夕食後ホテルの食堂でぐずぐずしていた晩、ぼくはついに決心して、彼らに会いに行くことにした。たんに到着を知らせるだけの、ほんの短い訪問にしよう、と考えた。

ビアッジ家の屋敷は、村から少し外れた、隣村に向かう登り道沿いにある。外との仕切りになっているかなり高い石壁には、干からびた蔦がもじゃもじゃとからみつき、節くれだった灰色の根が網状に枝分かれして、壁をはい登っていた。松や月桂樹など、大きな樹木が何本か、手入れの行き届かない状態で庭に生い茂っているのが、入口の鉄柵のあいだから見えた。もうすっかり夜で、柵の向こうには、館の形が闇に浮き出ている。それは最近建てられた、横に延びた低い建物で、レンガ敷きのテラスがあり、鉄製の白い椅子やテーブルが外に出たままになっていて、さらにその横には妙なパラソルが、半開きのままつぶれて地面に転がっていた。ガレージに通じる砂利の小道には、グレーの古いメルセデスが停めてあって、ぼくはその前部フェンダーに衝突の痕があるのに気がついた。以前には見たことのない車で、いったいどうしてこんな車が停まっているのかと考えていると、家の裏、まさしくガレージの方で、何か音がし

たような気がした。熊手か何かが倒れたような音で、慌ただしい足音がそれに続いた。耳をすましてみたが、あたりはまったく静かなままだ。夜を乱す物音は何もなく、ビアッジ家の鎧戸はみな閉まっていた――一階の広いガラス窓は金属製のシャッターが下り、二階の各部屋の、明るい色の木製の鎧戸もきちんと閉まっている。

道端に立ってもう少し屋敷の方を眺めてから、ホテルに戻ろうとしたときに、ぼくは屋敷の入口の門の柵のところに、郵便箱があるのに気づいたが、それは人間の背丈の半分くらいの高さの場所に、ねじれた針金で柵の一本につながれて、闇の中、斜めに吊り下がっている。おんぼろな郵便箱だが、それでもちゃんと鍵が掛かっていて、小さな金属製の縦蓋を押し下げて開けようとしても、うまくいかない。無理にこじ開けるかわりに、隙間から指を入れてみて、結局

そこにあった六通の手紙をやすやすと引き出すことができた。それらの手紙に何気なく目をやって、いずれもごく最近の手紙で、いちばん古いものでも十月二十四日の日付であることを見て取ってから、ダイレクトメールと思われる二通は元に戻し、他のものはそのまま、自分のポケットに滑り込ませた。その四通のうちに、数日前にパリで投函した、ぼく自身の手紙もあるということには、もちろんただちに気づいていた。郵便箱に戻しておいたってよかったのだけれど、しかしサスエロ到着を告げる手紙を残しておくのは、ぼくにはどうも――いずれにしろ、今となっては――得策とは思えなかったのだ。

翌朝、タクシーがホテルに十時頃迎えに来た。村を出てから、もうしばらくたつが、車は雨降りの道を、木々のあいだを縫って登っている。息子は後部座席の、ぼくの横に座って、シートの上で両脚をうんと広げ、革のアンクルブーツをはいた小さな足先をぴんと立てている。片方の手をぼくの膝に置き、もう片方の手で、ぬいぐるみのアザラシを自分のアノラックに押しつけて抱きかかえている。プラスチック製の透明なおしゃぶりを口の中でゆっくりと動かしながら、ひどく真面目な、考え深げな様子でぼくを見つめている。ホテルを出てから、運転手は黙々と運転を続けている。黄色い巻紙で巻いたタバコを口にくわえてはいるものの、曲がりくねった道でカーブを切り続けなくてはならないので、両手を片時もハンドルから離すわけにはいかず、したがって気の毒にも、くわえたタバコを口から離すこともできない状態で、それゆえ顔はありありと紅潮し、両方の耳から少々煙が出ている。ぼくの方は、後部座席でうつらうつ

らしながら、彼のこめかみに沿って立ち昇っていくこの頼りなげな煙が、ついには彼の頭のまわりで、何とも不思議な形の輪になり、消えがてな後光のような素晴らしい効果をかもし出しているのを、ぼんやりと眺めていた。タクシーの電話番号を調べたのはこの朝になってからで、十時少し前に電話して、サンタグラロまで行ってもらうことにした。サスエロの隣のこの小さな港で、いろいろ買物をしようと思ったのだ。

サンタグラロの港は、冬はそれほど訪れる人もないところだが、それでも五十隻ほどのレジャー船がいつでも停泊していて、船舶用の物品を扱う専門店があり、そのほかにも郵便局と銀行、スーパー、そしてレストラン数軒があった。昼までいて昼食を食べていくつもりで、村の広場で降ろしてもらったとき、運転手に、昼食後に迎えにきてくれるよう頼んだ。相変わらず険悪な空模様を眺

めながら、ぼくは息子のベビーカーを押してスーパーに向かった。ベビーカーの中で体をしゃんとさせて座り、神経を集中して前を見つめている息子の姿は、まるで船団の先頭を守る、小さな不動の船首像という感じだが、ときどき、舗道にぬいぐるみのアザラシをわざと落としては、ぼくがそれを拾ってやるのを、断固とした無関心と、慎重な好奇心とが交じったまなざしで見つめるのだった。気をつけなさいよ、とぼくは言った。スーパーで、買う物の見当をざっとつけるために、ベビーカーを押しながら売場をまわっていると、息子は突然、虚空に腕を突き出して、そばのものを何でもかんでもひっつかもうとし、ぼくはベビーカーをうまく操縦して、間一髪のところで、彼を品物から遠ざけなければならなかった。ベビーカーがふいに加速すると、彼は少しどぎまぎした様子になり、その都度後ろに反り返っては、しばらく起きなおらないのだけれど、それでも、ひとたび落ち着きを取り戻すと、また腕を伸ばしては、何か手頃な高

さに置かれた品物に狙いをつける。とうとう、ぼくはゆっくり買物をするために、レジに並んでいた年輩の婦人に、ほんの少し、買物を済ませるあいだだけ、子供を預かってもらえませんかと頼んでみた。婦人は喜んで引き受けてくれたが、ぼくが息子の足元にうずくまって、これからしばらくのあいだ、きみはこのおば様のお世話になるんだから、ご挨拶のキスをしなければいけないよと説明してきかせると、ベビーカーに乗った息子は、突然とても悲しげな顔になった。とても優しいおば様なんだよ、とぼくは言った。お名前は何とおっしゃいます？　マリ＝アンジュです、と婦人はぼくらに近づきながら言い、息子に向かってかがみこんだ。とてもやさしいおば様だよ、マリ＝アンジュさんは。おば様にキスをしたくないの？　とぼくは息子に言った。見てごらん、お父さんはマリ＝アンジュさんにキスするよ（そう言って、ぼくが婦人にキスをすると、婦人は少々驚いた様子だった）。

スーパーを出て、村の中心に向かい、いちばん大きな通りのカフェのテラスに腰を下ろした。外にはプラスチック製の、白い円テーブルがいくつか出ているだけで、朝のどしゃ降りの名残りの雨粒が何滴か、椅子の背にまだ消えずに残っている。タバコに火をつけて、目の前の、道の向こう側に広がっている港を眺めたが、岸壁では停泊中の数十隻のヨットが、風を受けてゆるやかに揺れ、スパンカーブームやシュラウド〔マストの支え索〕がぶつかりあって、かちかちと鳴り続けている。たいていのマストは帆が張られていず、むきだしのまま光沢を放って空高く伸びており、頂上には、小さな旗やら白いハンカチやら、頼りない布切れがくくりつけられていて、それがあちらこちらで風にあおられ、もみくちゃになりながら帆桁に打ち当たっているのが見えた。少し向こうの、港長事務所の建物の前には、修理中の大きな漁船が、修理用ドックのまん中の

船台の上に引き上げられてあって、その前で二人の男が、どうやら船体について語り合っているらしく見えたが、それに対し、三人目の男が、車の運転席に座ったまま、ウィンドーを開けて議論を見守りながら、ときおり口をはさんでは、両者の提案を、諦めきったような態度でことごとく斥け続け、それをまた二人は、嫌な顔もせずにごもっともと受け入れているようで、何だか車の男が船の持ち主で、実際のところ、彼の船はもうだめなんだとでもいうような感じだった。それ以外には村はいたって静かで、ぼくはカフェのテラスでアペリチフを飲みながら、ときどきかたわらの息子に目をやり、ベビーカーにおさまった息子が、水平線の彼方に視線をさまよわせているのを眺めた。ぼくらの前をたまに行き来する車は、村を素通りして行ってしまい、息子はビスケット片手に、それを面白そうに目で追い、ベビーカーの外にまで頭を傾けて、去っていく車を貪るように眺めていた。

昨晩ビアッジ家の郵便箱から失敬してきた四通の手紙を、ポケットから取り出して眺めながら、どうしてそんなことをしたのか自分でもわからない気持ちだったが、というのも、あのときは、後で返せばいいやと一瞬考えたのかもしれないが、ビアッジ家の人たちの手に戻す際に、ちゃんと説明をつけなければならないということは、今から思えば当然ではないか。いったい、どんな説明ができるというのだ？　それなら、何食わぬ顔で一夕、またあの屋敷に戻り、郵便箱に戻しておくことにしようか？　わからなかった。いずれにしろ、ビアッジ家の人たちが、ぼくがパリから何日か前に投函した手紙をまだ受け取っていなかったのは、悪くはなかったなと考えた。でも、それはただ、いく日かサスエロで過ごすつもりだということを伝えるだけの簡単な手紙に過ぎなかったが、しかし、もし彼らがこの手紙をすでに受け取っていたなら、もはやこれ